絵仏師良秀（宇治拾遺物語）　口語訳

動画・プリント1

これも今となっては昔のことだが、絵仏師の良秀という者がいた。（ある日、良秀の）家の隣から火が出てきて、風がおおいかぶさってくるように吹いて（炎が）迫ってきたので、（良秀は）逃げ出て、大通りへ出た。（家の中には）人が（注文して）描かせている仏もいらっしゃった。また、衣を着ていない妻子なども、そのまま（家の）中にいた。（良秀は）それも気にとめず、ただ（自分が）逃げ出したのをよいことにして、道の向かいに立っていた。

動画・プリント2

見ると、（火は）既に自分の家に燃え移って、煙や炎がくすぶってきた時まで、（良秀はその様子の）だいたいを、道の向かい側に立って眺めていたところ、「驚いたこと。」と言って、人々が、やってきて見舞ったが、（良秀は）慌て騒がない。（良秀の態度を不審に思って）「どうしたのか。」と人が言ったところ、（良秀は道の）向かいに立って、家が焼けるのを見て、しきりにうなずいて、時々笑った。「ああ、大変な得をしたなあ。長年にわたって下手に描いていたものだな。」と（良秀が）言う時に、火事見舞いに来た人々が、「これはまあどうして、このように立っていなさるのか。あきれたことだなあ。物の怪（霊）が取りつきなさったか。」と言ったところ、

動画・プリント3

「どうして、物の怪が取りつくはずがあろうか、いや、取りついてなどいない。長年、不動尊の火炎を下手に（＝悪く）描いていたのだ。今見ると、このように燃えていたのだなあと、納得したのだ。これこそもうけものよ。この（絵仏師としての）道を専門にして、この世に生きていくには、せめて仏だけでも上手に（＝良く）描き申しあげるならば、百軒や千軒の家も、きっとできるだろう。おまえたちこそ、これといった才能もお持ちなさらないので、物をもったいなく思いなさりませ。」と言って、あざ笑って立っていた。

その後のことであろうか、（良秀の絵は）良秀のよじり不動といって、今に至るまで人々はみな称賛し合っている。